

はじめに願あり

—入出二門の源泉—

安田理深

一

『入出二門偈』を拝読していく心構えですが、一言でいえば聞思ということでしょう。よくいわれるように『大無量寿経』には「聞其名号」といってありますが、親鸞は『涅槃経』によって、聞は聞思とっております。思は今日のことばで思惟という意味です。聞は聞法です。そのことばの中に我々の態度が語られているわけです。

『入出二門偈』には二つの本が残っていて、一つの本（法雲寺藏聖人真蹟本）は始めに註釈的なことが序分の形でついています。その中に「入出二門斯れより出たり」とあります。「斯れ」とは『浄土論』あるいは『往生論』往生浄土の論です。入出二門の源泉は天親菩薩の『浄土論』だというわけです。まあいってみれば『入出二門偈』は『浄土論』に基づいているということができます。『教行信証』もまた論という性格があります。そこに『歎異抄』と違う背景があります。

今日では親鸞の教は一般には『歎異抄』によって理解されていますが、御承知のように、『歎異抄』を取りあげたのは清沢満之師です。それ以前は『歎異抄』は存在はしていたがむしろ伏せられておりました。それを新しく取り出

したのは清沢先生の功績です。

『歎異抄』には『教行信証』にない感銘深いことばがある。『教行信証』はとりつきにくい。しかし『歎異抄』は耳の底にとどまるところを書いた。つまり親鸞の教に触れて感動した人が感動をもつて語ったのです。そこに『教行信証』にはない面目があるのです。

しかし『教行信証』は『歎異抄』で尽くされないものがある。それは論という意味です。往生浄土の論の論という性格があります。親鸞は経家、論家、釈家ということばを使っています。著者についていうと論家は菩薩です。龍樹菩薩、天親菩薩を論家という。国でいえば大体印度です。中国や、日本の方々は七高僧という釈家という。今日『浄土論』といっても『論註』を通して頂くのですが、『論註』は龍樹と天親を統合してそこにまとまりを持っています。だから曇鸞は中国の人ですが、伝説によれば菩薩として崇められた。その伝説を通して親鸞は印度の二菩薩と同じく菩薩として扱われています。曇鸞は謙讓に自分の製作したものを註釈といっておられますが、内容からみると論の意味を持つ。だから親鸞は『論註』を逆倒して『註論』といわれます。『論註』を論として、作者の曇鸞を菩薩として取り扱われた。この意味でやはり論家といえます。

經典に沿って印度で論が成立していますが『教行信証』は論でないが、論家という確信を持って親鸞が語られたんじゃないかと思えます。『教行信証』は民衆の教化というだけでなしに思想界に訴えるという大きな意味があります。普通、仏教の中に大乘仏教があり、大乘仏教の中に聖道門や浄土門があり、浄土門の中に浄土真宗があるというわけだんだん小さくなったと考える。思うに親鸞の『教行信証』の内容、また浄土真宗ということばは宗派ではありません。普通は『教行信証』は宗派の書物になっている。本願寺という教団、宗派のものになっています。ところが派ではない。そうではなくて宗だということです。宗と派とは違う。派は今日のことばでいえばセクト。御一派とはセクトの名です。宗には原理的なものが語られてある。そこから見ると親鸞の『教行信証』は大乘仏教そのものです。宗

は原理的なもの、具体的には念仏、本願でしょう。はじめとなるものが宗です。

私はこの会で学生、青年の諸君が主になって学んでいただきたいと思えます。説いて聞かせる会でなく自分を明らかにする会にしていきたい。前にいったように学問というのは聞法です。聞法こそ本当の学問です。学問を離れると布教となってしまいます。布教家は職業的宗教家です。そうやってほしいとは思いません。坊さんになる前に本当の人間になってほしいんです。人間になってりゃ坊さんになっても差し支えない。人間になる前に坊さんになると墮落するんです。

学問は人としての学問ですから、学校に行っておるということでない。『歎異抄』に「ゆゆしき学匠達」といつてあるあの学匠です。ゆゆしき学匠というから、普通は聖道門の偉い人だ、学問する者は凡夫ではなく聖者じゃないかと考えるが、凡夫だから学問せんなんのんです。学問なんて威張ってやるものじゃない。本当に優れた人は学問なんかいらぬものです。仏は無学という。世間と反対です。学匠は有学という人です。因位の道を有学、果上は無学、阿羅漢とか如来とかいうのは無学果というんです。世間と逆です。学問がいるのは偉いからでない。愚かだからです。そういう所に学問の意義が違ってくると思います。

一一

親鸞の『教行信証』は本願によってはじめて成立つ。本願というものが宗になるのです。本願は具体的には念仏です。曾我先生はよく「はじめに名号あり」といわれます。「はじめ」となるものが大切であって、五念門の第五に回向門というのがあります。入出二門は内容からいえば五念門です。前四は入門、第五は出門です。入出という構造で五念門が説かれたのです。出回向門には「回向を首はじとなす」とあって、終りに置いてあるが実は始めなのです。我々からいうと礼拝、讃嘆、作願、観察といつて最後に回向門に達するのですが、実は最後に到達した回向門から一切が

始まるのです。これまで通って来た道が全部見返されるわけです。こういうわけで「首^{はじめ}」という字は重要な意味を持っているのです。はじめてというのは本願といってもよいが名号です。キリスト教のヨハネ伝に「はじめに言葉あり」といわれるが、そこから出発するのです。『旧約聖書』の創世記には「はじめに神あり」とあります。はじめということが大切です。

名号はことばです。本願が名告ることばです。名号の持つ意味は本願の名ということですが、佐藤とか山田とかいう名ではない。杉や桜という名でもない。本願が人間に呼びかける言葉です。ただ記号でない。その名号を念仏といふ称名という。名号によってはじめて称名することもできるし、又憶念することができる。名号がなければ仏の本願を憶念してみようがない。ただ空想するより仕方がないでしょう。称名も念仏も名号も同じことです。古い聖典を見ると同じように取り扱ってあります。

称名といい、念仏といい、名号といっても本願を離れるとばらばらです。たとえてみると名号は行という。本願が名号として行じ、働くんです。ところでこの間『教行信証』の英訳が完成したというので貰ったんですが、鈴木大拙師はいろいろ苦勞して本願とか行という言葉を読みますね。信という字はあまり苦勞がない。一番問題になるのは行ということばです。一般的にいうと Praxis (実践) です。英語では act をあてる。しかしそれではなかなか意が尽せない。

ここで思いだすんですが、ゲートルに『ファウスト』という作品があって、その中に『聖書』の「はじめに言葉あり」という所を翻訳する場面があります。「はじめに言葉あり」のギリシヤ語はロゴスという。「はじめにロゴスがあった」というんです。日本では『聖書』は明治に翻訳されたのですが翻訳としては傑作です。中国ではロゴスを道と訳した。道は行です。ゲートルの『ファウスト』の中で主人公のファウストが考えて「はじめに力あり」と「力」(Kraft)と訳すのですが、落ちつきません。満足せぬのです。だから更に Tat これも力や働きと訳しました。働く能力で

す。ところが「行巻」でも大行ともいい、正業、本願名号正定業というようにです。ね、称名だとか、念仏だとか、南無阿弥陀仏だとか違った概念が次々に一つとして扱われています。大拙師の訳では行は *living* (生きている) となっています。苦勞されたんでしょね。本願が人間の上に生きて働いているというんです。

三

我々は行というと分ったというが、ことばをよく吟味してみる必要があります。働くというと手を動かしたり、足を動かしたりすることを考えている。本願が死ぬと教理になる。我々が職業宗教家になると今まで生きていた教理が教理になる。教条主義になるのを死んだというんです。聖道が死んだというのは消えたということではない。教は残っているが教だけになったのを死んだというのです。行にならぬ。行とか証とかは生きた人間の上にあるものです。

教が図書館の本の中にある、これを龍宮に入ったというんです。本になったのを仏法が死んだというんです。本の話は死んでいる。仏教を勉強するといっても教理を研究することを考えたら何にもならぬ。仏教を学ぶのは教条主義を破ることです。「聖道の諸教は行証久しく廃れ」とは教理になったということです。人間でも灰になってから死んだというのではない。息が止った時死んだというんです。灰になるのを待たぬでしょう。仏法でもそうです。教理になった時もう死んでるんです。教理でない脈々として生きている、我々の全身全霊に満ち満ちているものを生きているというんです。行としてね。

仏教では信者とはあまりいいません。むしろ行者といえます。念仏の教えを単に覚えている人を行者とはいわない。理解者です。本願もよいものだと周辺をうるついでにだけ。宗教とは大切なものだと分った」といって、にすぎない。そうではありません。本願に立って本願に生きるというのでなければならぬ。本願を傍観しているのではない。本願に生きる人を行者というんです。

行というのが本願をとってしまえば、名は行という意味を失います。仏の名が記号になります。ところが本願がつくと名が行となります。行たる名です。我々は名号を通して本願に触れるんです。本願が現に生きて働いているのは名号です。行として働いている。そこでは本願と名号は一体です。本願の名号、名号の本願です。『歎異抄』に誓名別信計とあって、本願と名号を二つに分けるのは間違いだといっているでしょう。

つまり本願に先立って名号があったんです。名号がないと本願に触れてみようがない。我々の上に本願が行しておく、その名号を通してその源泉に触れるんです。本願の呼びかけによってはじめて本願に覚めるのです。もし本願の呼びかけなしに本願を考えると、絶対精神などというようになって何だか分らなくなるんです。本願のことはを通してことばの魂に触れるんです。本願は名号の魂でしょう。

そういう意味で名号が一番始めにあるということです。しかし名号は単なる名ではない。本願の名です。だから本願も亦始めといえぬことはない。その時は *primitiv* の原理です。

本願は原理の意味で始めであり、名号は、*Anfang* の意味で始めです。本願というのが願が本になるんです。そこに本願を始めとして仏教が成立っているのです。

四

『教行信証』は仏教の論といっても仏教概論ではない。何か原理があるんです。仏教をして仏教たらしめている原理に立って、仏教を語っているのです。そういうものを宗というのです。曇鸞大師は『論註』の中で天親菩薩の願生には宗があるといっています。その時の宗とは個人的な意見ではない。歴史的な背景があるのです。天親菩薩でなしに、超個人的なものに立ってあるということです。

浄土真宗とは宗派の名ではない。大乘仏教の根幹を押えて浄土真宗というんです。選択本願浄土宗、そこに大乘仏

教の原理がある。

つまり本願を原理とし、名号を体として仏教が成立つという意味です。宗派の名ではないのです。具体的にいうと宗は大切ですが派はセクトでしょう。セクトは破らねばならぬ。セクトから解放せねばならぬ。清沢先生の秀れた功績は宗派を破ったことにあります。宗門の教学ではなく、人間の教学から先生は出発しておられるのです。だから身は派の中にあっても思想は派を超えている。始めから派を超えた所から出発している。だから派から見ると異安心というんです。無力なものなら異安心といわぬ。力があるからいうんでしょう。力があるというのは感動があることです。親鸞は法然上人の教をうけて「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛なり」といっておられる。脈々として動いている感動ですね。人間が感動せぬ所に仏教が生きている筈がありません。

教条主義派は感動を恐れるのです。小さい無力なものならば眼中に置かぬ。眼中に置かざるを得ぬようになると弾圧する。弾圧する時はする方が負けたんです。『教行信証』は「大乘仏教ここにあり」と叫んでいるのです。もし選択本願をとったら大乘仏教といっても空論だということです。いや天台宗も、真言宗も大乘仏教というかも知らぬが、大乘の教理があるだけで空論だということです。それが浄土宗であるということです。いろいろある中の一つでない。現に生きて働いているのは選択本願なのだ。念仏のある所に仏教は生きているということです。これは自分の宗派を褒めあげるのではない。褒めて、広告せねばならぬのは派です。

『教行信証』は「大乘仏教ここにあり」という現に生きて働いている教学を『大無量寿経』の中に見出したのです。大乘仏教そのものは念仏だということです。そういう意味で『教行信証』は論でないかと思うのです。親鸞という名が使命を語っているのです。『教行信証』は単に信仰を表白しただけでなく、それを通して大乘仏教の根幹を明らかにしたのです。だから『教行信証』は新たな浄土論でしょう。

七高僧の中には他にもあるが法然の伝統を遡るとそこに『浄土論』があり、『浄土論』を遡ると『大無量寿経』が

ある。『浄土論』は前には『大無量寿経』を承け、後には『教行信証』を生んだという位置を持っているのです。『浄土論』は『教行信証』の「信巻」に取り上げられています。しかし『教行信証』の全部が取り上げられているといってもよいでしょう。

「教巻」の始めには「謹按浄土真宗、有二種回向。一者往相二者還相。就往相回向、有真實教行信証」と述べられている。そして「教巻」を述べるのに眞実の教を全体の上から明らかにしておられる。そこに二種の回向がある。二種の回向の中に『教行信証』を包むのです。

その回向を明らかにするのが『浄土論』です。その回向について曇鸞大師は二種の回向ということをいわれています。『論』では回向門を明らかにされた。更に遡ると『大無量寿経』には本願成就の経文があって「至心に回向したまへり」とでています。その回向の意義を明らかにされたのが五念門です。

「信巻」には「一心の華文」という。これは『浄土論』を讃嘆されることばです。だから「一心偈」といってもよい。天親は「願生偈」と名づけた。親鸞が浄土を論ずるなら、「一心偈」といふようなものですけど、その浄土の論を「入出二門偈」といっています。「信巻」で見ると「一心の華文」といってある。本願成就の一心を述べられたのが「願生偈」です。願生の一心です。入出二門は、本は『浄土論』の問題であるが、それを『浄土論』から取り出した。そこで、この一心と入出二門の関係が始めから問題となります。そういう事を明らかにできればいちばん良いですね。

五

「願生偈」は偈文、歌、詩です。つまり詩歌です。偈文はことば通りからいえば韻文です。散文は長行という。行は歩む意味でなくて文章の行の意味です。つまり散文を表すことばです。韻文は短く、散文は長い。

『浄土論』も韻文と散文でできています。散文の所を讀むと「論曰」とあります。『浄土論』とか『往生論』とか

というのは散文があるから論というのかと考えるかも知らぬが韻文が論です。散文は韻文に外から加えたのではない。韻文の中にあるものを取り出したのです。韻文に含まれている意味を拵げたのです。格からいえば散文の方が劣っている。本当は韻文だけで充分なのです。散文は格調が低い、韻文は格調が高い。「耳あるものは聞け」これが韻文です。韻文は解釈を超えている。朗々と読誦すべきものである。そういう所からいうと韻文だけで充分です。

韻文を見ると第一行に「世尊我一心」とあり、第二行には「我依修多羅 真実功德相」とあります。その真中では「故我願生彼 阿弥陀仏国」とあり、終りには「我作論説偈」と四ヶ所に「我」を置いて「願生偈」の文章の組織を表しています。これ以上は無用、これ以下では足らぬと整然としています。

我というのは何か。自分を表す文だという意味です。告白 *Bekentnis*、英語の *confession* です。天親菩薩が自分自身を表白したことばです。天親菩薩は「願生偈」で自己全体を尽しているのです。解義分の文は「我」という字が一つもない。かわりに善男子、善女人がでてゐる。五念門、つまり行の主語は善男子です。天親菩薩という我は一心の主語、信心の主語です。行の主語は善男子、善女人で、或いは菩薩といつてもよい。善男子、善女人が五念門を行すると五念門によって善男子、善女人が菩薩になってしまう。だから菩薩という語がでてくるのです。「願生偈」と解義分はそれだけの違いがあるのです。

論の体は解義分を通してみると、形式上は始めの二行は序分です。「観彼世界相 勝過三界道」からは正説分で、その真中に「故我願生彼 阿弥陀仏国」という字がある。正説分全体を代表する我なんです。最後の「我作論説偈」の我は結文です。こういう工合に序分と正説分と結文とに我があり、序分中に二つの内容があるから我が二つ置いてある。それで四ヶ所に我があります。

形式的には我は四つあるが、内容からいうと「我一心」がいちばん大切です。『論註』には「故論主建言我一心」とあります。文のはじめに「建」という。「建」の字が大切なんです。なぜ大切かというと、はじめが終りを包んで

いるのです。はじめに一心がある。曇鷲は「我一心」と、我と一心を離さない。一心そのものが我なんです。一心をもつて我となす。我という字は主体を表すのです。一心によって人間は主体を確立するのです。

もし一心なくば我々は縁によって動いておるだけでしょ。縁によって一喜一憂しているだけです。少しめでたいと感激し、少し気に入らぬと悲観して自己を忘れる。感激するの我はないし、悲観するの我はない。我がなかったら一生浮き沈みしているだけになります。

絶対自由の我を確立するために宗教があるのです。絶対自由の我は主体を表すのです。これだけは強制するわけにゆかぬ。『歎異抄』第二章には「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり。」と云うてある。これが私の信仰の全体です。賛成されるかどうかは皆さんの自由です。強制することはできぬ。勝手にせいというのではない。信仰だけは強制できぬ。

もっとも強制するのがあります。折伏といってね。また押し売りもある。自分が良いと思うと他人に勧める。これは外国人の考えです。それでアメリカ人なんか嫌われる。東洋の考えは「自己の欲せざるを人に施すことなかれ」です。だから逆です。外国人は自分のやりたいことを他人にもやらせる。反対です。押し売りできるのは商売だけでしょう。

信仰だけは宿業の中にあつて、宿業を超えている。宿業をはねのけるのではない。宿業を喜んで引き受ける。だから絶対自由です。喜んで引き受けるものを縛るわけにはいかぬ。そういう意味で信仰は絶対自由です。それが我ということです。

六

「願生偈」は歌というより自己を表白した歌です。讚美歌とか嘆仏歌というように、讚える意味があるから偈頌と

いうのです。ただの詩でなく、自己の信心を告白している。本願の徳をたたえる嘆仏を通して、一心を告白しているのです。嘆仏という仏は信心の中に生れたのです。清沢先生は「如来というのは我が信ずる如来だ」といわれる。如来を信ずるといいますが、如来と信ずると二つあるのではない。曾我先生の九十歳の時の講演の題は「如来あるが故に信ずるか、信ずるが故に如来在すか」です。若い時に清沢先生に聞かれて、それを思い出して題をつけられたのです。

多くの人は如来あって信ずると思う。実は信ずるところに如来あります。如来は何処かにあるのでなく自分の中に誕生したのが如来です。私を破って私の中に名告りをあげたのが如来です。実際いうと信心に救われるのです。如来に救われるというが、これは間接なんです。教としてそういうのだが、具体的な自覚の事実是我々の頂いた信心が我々を救うのです。信心そのものが如来です。そういう如来なるが故に讃嘆することができるんです。「願生偈」に即していえば、嘆仏を通してやはり信が表明してあるということができません。

だから偈文の方が論の体です。正説分は一心の心境を展開している。願生の一心は貧者の一灯のようなものですが内容は長者の万灯に勝る。「観彼世界相」とはつまり如来の世界です。我々は穢土におるのですが、我一心を開けば穢土におるままで穢土を超えて如来の世界に触れる。だから安んじて穢土におれるんです。

偈文にはいろいろ述べられてあるが解義分を通して見ると二十九種の莊嚴功德が説かれている。二十九種の莊嚴功德は句である。論の体は二十九句です。他の論に「論体金剛句」ということばがある。句とは文章です。いうてみれば『浄土論』の体は金剛句でしょう。

浄土はアメリカがあるようにあるのではない。つまり外境ではなく純粹の内面の世界です。浄土は意味の世界です。浄土の話はいかにも遠いように考えて、死んでからの話というが、死んでからあるわけでない。死んでからというものも深い意味があるが、本願・浄土の歴史は深い背景があつて一朝一夕の話でない。人間の魂の底を流れてきている。

これが宗教心、願生心です。あらゆる衆生の生活経験を通して磨かれてきている。苦勞してきているのです。我々は

自分が苦勞したと思つてゐるがそうでない。願生心が苦勞してきたのです。願生心が人間の苦勞をなめつくして私の上に成就した。私の上に成就するまではそれだけの長い道程がある。だから「ご苦勞さま」という。わしが苦勞したというのは苦勞せぬからいつてゐるのです。

そこに意味の世界、意味とは「恭げない」という意味の世界がある。その他に浄土はない。そういう世界を開くところに宗教があります。

どんな苦勞をしても恭げなさをもつて生きてゐる。いかなる苦勞にも甘んじられる。だから地獄に墮ちて後悔せぬというのです。この恭げなさから見れば墮地獄なんて何でもないと意味です。

(本稿は、昭和四十八年十一月、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における第三講の筆録である。文責 編集部)